

# 清・周春著『杜詩雙聲疊韻譜括略』成書考

——あわせてその特長と問題點とを論ず——

丸井 憲

はじめに

- 一、『杜詩雙聲疊韻譜括略』成立の経緯
    - (一)『杜詩雙聲疊韻譜』序の内容
    - (二)「凡例五則」「刪定凡例七則」の内容
    - (三)『杜詩雙聲疊韻譜括略』序の内容
  - 二、『杜詩雙聲疊韻譜括略』の特長と問題點
    - (一) 特長
    - (二) 問題點
- おわりに

## はじめに

清代の音韻學者・周春（一七二九～一八一五）は、浙江海寧の人で、松霽と號した。乾隆十九年（一七五四）の進士で、廣西岑溪縣の知事を務めて治績があった。『十三經音

略』十三卷、『杜詩雙聲疊韻譜括略』八卷、『爾雅補注』四卷、『小學餘論』二卷などの著作があり、『清史稿』卷四八一「儒林傳」および卷四八四「文苑傳」にその傳がある。とりわけ『杜詩雙聲疊韻譜括略』八卷は、中國古典詩研究においてはなほだ希少な書物であり、その自序に見える周春自身の言葉によれば、「杜詩の雙聲疊韻を以て創めて一書を爲すは、則ち此より始まる（以杜詩之雙聲疊韻創爲一書、則從此始）」ものである。なお同書には、周春と同時代の王鳴盛（一七二二～一七九七）、錢大昕（一七二八～一八〇四）、趙翼（一七二七～一八一四）ら、乾隆・嘉慶期を代表する碩學・文人たちが序文や題辭を寄せていて、うち錢大昕の序にも「宋より以來、杜に注する者、母慮千百家、訓詁・事實に於いて討索遺すこと靡し。雙聲疊韻を以て杜を求むる

に至りては、則ち吾が友・周松靄先生より始まる（自宋以來、注杜者母慮千百家、於訓詁事實討索靡遺。至以雙聲疊韻求杜、則自吾友周松靄先生始」と記されている。

今人による論考では、許總氏の「審音歸母、謹嚴細密——周春『杜詩雙聲疊韻譜括略』初探」と題するそれが基本的かつ必讀のものであるが、氏は「音韻學の視點から、杜詩を研究することも一つの重要な方法であるはずだが、實際には歴代の膨大な注釋書や研究書と比べ、ほとんど空白地帯となつて」おり、同書の「杜詩學に對するパイオニア的な貢獻は、實に貴重なものといわねばならない」と述べている。

本稿では、こうした希少な書物の成立事情を、周春自身の序文などによつて明らかにしようとするものである。あわせて、この書物もつ特長および問題點を指摘しながら、同書がいかなる學術的價值を有するかを考えてみたい。

## 一、『杜詩雙聲疊韻譜括略』成立の経緯

本節では、『杜詩雙聲疊韻譜括略』という書物がいかなる経緯をたどつて成立したのかを、周春の自序や凡例を丹

念に讀み下しながら確認してみることにした。じつは周春の自序には、①『杜詩雙聲疊韻譜』におけるそれ（以下「譜序」と略稱）、および②『杜詩雙聲疊韻譜括略』におけるそれ（以下「譜括略序」と略稱）の二つが存在する。これは『杜詩雙聲疊韻譜』という稿本が、『杜詩雙聲疊韻譜括略』という刻本に先んじて成立し、周春はそのいずれにも序を付した結果、ふたつの序文が存在することになったのである。

### （一）『杜詩雙聲疊韻譜』序の内容

以下ではまず「譜序」の記載を確認する。この序文は周春と客人との問答の形式をとつており、その客人が退出したあと、その内容を序にしたためたという體裁になっている。そして末尾には「乾隆癸未（二八年、一七六三）冬日、松靄周春纂」という自署がある。

冒頭では、杜甫詩における雙聲疊韻を論ずることは、けつして意固地な穿鑿ではなく、中國古典詩に脈々と傳わる「古法」の探求であり、その「古法」を傳えた作品こそが杜甫詩の「正格」に屬するのであり、雙聲疊韻はそもそも杜甫の獨創ではないのだと説く。

余、「杜詩雙聲疊韻譜」を輯して成る。客或いは見て之を訝りて曰く、「子の詩を論ずる、之を固（固執）に失すること無きを得んや。子の杜を論ずる、幾んど鑿（穿鑿）に近からずや」と。曰く、「此れ僕一人の臆見に非ずして、杜の正格なり。抑も杜の獨り創る所に非ず、乃ち作詩の古法を相傳ふるなり」と（余輯杜詩雙聲疊韻譜成、客或見而訝之曰、子之論詩、得無失之固、子之論杜、不幾近於鑿乎、曰、此非僕一人之臆見、而杜之正格也、抑非杜所獨創、乃相傳作詩之古法也）。

客人が、ならば詩というものは必ず杜甫がしたように、雙聲疊韻の手法を守るべきものであるのか、と問えば、いや、そうではない、杜甫の詩をもっともよく學んだ黃庭堅の詩を見れば、必ずしもこうした手法を守つてはいないが、それでも杜甫詩の神髓に迫るものがある、といい、雙聲疊韻の手法を守らずとも、佳い詩はやはり佳い詩であることを妨げない、と周春は述べる。

客曰く、「信に子が言の如くんば、詩は必ず將に是の若くならんとするか」と。曰く、「否、然らず。是

れ何の言ぞや。千古、善く杜を學ぶ者、涪皤（＝涪翁。黃庭堅の號）に過ぐるもの無きも、此の法に於いては復た墨守せず。而るに蒼古秀勁、神髓は浣花（＝浣花溪。杜甫を指す）に逼真す。要（要諦）は自ら摩滅す可からず。然らば則ち合する（雙聲疊韻の古法に合致する）者固より美を盡くして又た善を盡くす。合せざる者も亦た豈に佳き詩と爲るを害せんや（客曰信如子言、詩必將若是耶、曰、否、不然、是何言也、千古善學杜者無過涪皤、於此法不復墨守、而蒼古秀勁、神髓逼真浣花、要自不可摩滅。然則合者固盡美而又盡善、不合者亦豈害其爲佳詩哉）。

そして周春は、人物・山水・花鳥など彩色を精緻にほどこした唐代以前の古い畫風と、白描・寫意・水墨など簡便を旨とした宋代以降の新たな畫風との違いを引き合ひに出し、畫風の違ひに優劣がないのと同様に、雙聲疊韻という「古法」を守るか否かといった詩風の違ひにも優劣はないのだ、と述べる。

且つ客、夫の畫を觀ずや。唐より以前、人物・山

水・花鳥の類、咸な色を設けて精細を尚ぶなり。後世

に追<sup>お</sup>びて日に簡便に趨き、古法<sup>こふつ</sup>淺<sup>あや</sup>く微<sup>こ</sup>なり。然るに龍

眠〔李公麟〕の白描、何ぞ顧・陸・張・吳〔顧愷之・

陸探微・張芝・吳道玄〕に遜らんや。雲林〔倪瓚〕の

寫意、何ぞ王・李・荆・關〔王維・李思訓・荆浩・關

仝〕に遜らんや。石田〔沈周〕の水墨、何ぞ徐・黃・

邊・趙〔徐熙・黃筌・邊景昭・趙昌〕に遜らんや。兩

途は竝行して悖らず、蓋し時代の風會に由りてこれを

爲す。儻し必ず此を優れて彼を劣るとするは、誠に拘

墟〔狹隘〕の見なり。但だ龍眠をして顧・陸・張・吳

を議して形似と爲さしめ、雲林をして王・李・荆・關

を笑ひて俗筆と爲さしめ、石田をして徐・黃・邊・趙

を詆りて脂粉と爲さしめば、則ち又た不可なり。畫體

殊なりと雖も同じく妙繪を推し、詩體異なりと雖も竝

びに名家に屬す（且客不觀夫畫乎、自唐以前、人物山水花

鳥之類、咸設色尚精細、迨後世日趨簡便、古法淺微、然龍眠

之白描何遜於顧陸張吳也、雲林之寫意何遜於王李荆關也、石

田之水墨何遜於徐黃邊趙也、兩途者竝行而不悖、蓋由時代風

會爲之、儻必優此而劣彼、誠拘墟之見矣、但使龍眠議顧陸張

吳爲形似、雲林笑王李荆關爲俗筆、石田詆徐黃邊趙爲脂粉、

則又不可也、畫體雖殊同推妙繪、詩體雖異竝屬名家。

## （二）「凡例五則」「刪定凡例七則」の内容

さて、「譜序」のあとには、①「凡例五則」、②「刪定凡例七則」といった二種の凡例がつづいていて、同書が成ったいきさつがこと細かにつづられている。まず①「凡例五則」の内容にしたがつて、稿本『杜詩雙聲疊韻譜』の成書に至る過程を確認してみることしよう。「凡例五則」には、一七六〇年に稿を起こしてから、一七六三年までに三度の改易を経、さらに一七七二年・一七七三年と二度の刪定をおこなったこと、「詩經」「楚辭」「文選」を参照しながら歷代詩賦の雙聲疊韻の調査をおこなったこと、唐宋の詩賦では、李杜のほか、王維・孟浩然、韓愈・柳宗元、温庭筠・李商隱、皮日休・陸龜蒙、白居易・蘇軾をおもにとりあげたこと、などがつづらられている。また雙聲疊韻は、晉宋以前から隱然として用いられてはいたが、齊梁以後になつて詩家の好尚となりはじめ、杜甫をはじめとする唐人はもつぱらこれに意を用い、宋代の江西詩派以降になるとあまり留意されなくなった、とも述べている。

一 是の編、乾隆庚辰（二五年、一七六〇）に創始し、稿三たび易ふるを經、癸未（二八年、一七六三）に迄りて稍く緒に就くこと有り。壬辰（三七年、一七七二）癸巳（三八年、一七七三）重ねて刪定を加へ、頗る心力を費やす。然れども杜を讀むこと未だ細やかならず、掛漏（遺漏）良に多く、之に兼ねるに家に藏書鮮なく、善本の較勘すべきもの乏しきに苦しむ。期するところ、博雅君子（博識な方々）の外訛（誤謬）を賜正せられなば、幸甚なり幸甚なり（是編創始於乾隆庚辰、稿經三易、迄癸未而稍有就緒。壬辰癸巳重加刪定、頗費心力、然讀杜未細、掛漏良多、兼之家鮮藏書、苦乏善本較勘。所期博雅君子賜正外訛、幸甚幸甚）。

一 三百篇及び楚辭は、古今の詩家の祖にして、所有る雙聲疊韻の字、これを載せて以て權輿（起點）を誌す。對偶の論に拘るに非ざるなり（詩經や楚辭については對偶を論ずることにはこだわらなかつた）。文選が諸詩の若き、晉宋以前は大都闇かに理と合し、齊梁而降は風氣尚ほ初めて開くに屬す。分かちて各門に附して以て杜の自りて出づる所を見すのみ（三百篇及楚辭、古今詩家之祖、所有雙聲疊韻字、載之以誌權輿、非拘對

偶論也、若文選諸詩、晉宋以前大都闇與理合、齊梁而降風氣尚屬初開、分附各門以見杜所自出爾）。

一 青蓮が諸體亦た多く合する（雙聲疊韻の古法になう）者は、茲に附して之を載す。李杜並び稱せらるるは乃ち千古不易の論にして、李は杜に較べて少しく疎なりと雖も、然れども正に未だ優劣し易からざるを見る可し。或るひと以爲らく、李は七音（字母）に精にして杜は毎に抵牾（矛盾）すと。此れ則ち強ひて鮮なき事を作すなり（青蓮諸體亦多合者茲附載之、可見李杜並稱乃千古不易之論、雖李較杜少疎、然正未易優劣也、或以爲李精七音而杜每抵牾、此則強作鮮事也）。

一 自來、詩家林立し、篇什充棟汗牛にして、烏んぞ能く具さに録せん。茲に王孟・韓柳・温李・皮陸・白蘇の諸家を探ること稍や詳らかなるの外、餘は特に流傳最も著はれし者を取りて間一二を附す。大約唐賢、此を守る者多く、宋初尚ほ遺意有り。江西宗派自り以後、名家乏しからずと雖も、然れども復た心を此に留むること無し（自來詩家林立篇什充棟汗牛、烏能具録、茲採王孟韓柳温李皮陸白蘇諸家稍詳外、餘特取流傳最著者間附一二、大約唐賢守此者多、宋初尚有遺意、自江西宗派以後、

雖不乏名家、然無復留心於此也。

一 杜賦も亦た雙聲疊韻に拘る、此れ古法なり。選賦〔文選の賦〕・李賦を以て焉（三）に附す。文中の駢句に至りても亦た復た略ほ一二を存すと云ふ（杜賦亦拘雙聲疊韻、此古法也、以選賦李賦附焉、至文中駢句亦復略存一二云）。

つづく②「刪定凡例七則」には、『杜詩雙聲疊韻譜』がはなはだ煩雜であつたため、もとあつた十六卷を十二卷へと刪定した経緯がつづられている。そのさい『詩經』『楚辭』の雙聲疊韻譜をばつざりと割愛し、また賦や散文における雙聲疊韻譜もすべて削るなど、大なたが振るわれた。なおこの「刪定凡例七則」の末尾には「己亥（四四年、一七七九）立夏日書」という周春の自署がある。

一 此の書鈔して成るも、太だ繁蕪なるに因り、圖譜の簡〔簡明〕を貴ぶの意を失するを恐れ、筐中に藏すること久し。友人余に勸む、「一片の苦心、棄置するは惜しむ可し」と。姑らく元の本に就きて割愛して之を刪存す（此書鈔成、因太繁蕪、恐失圖譜貴簡之意、藏筐

中久矣、友人勸余一片苦心棄置可惜、姑就元本割愛而刪存之）。

一 第一卷より第六卷に至るまで、各の附せし詩經・楚辭の雙聲疊韻の字は、並びに皆な刪去して當に自から單行すべし（第一卷至第六卷各附詩經楚辭雙聲疊韻字、並皆刪去當自單行）。

一 第一卷より第十卷に至るまで、載する所の杜の律詩・杜の古詩、及び附せし選詩・古詩・李詩・唐宋の詩は、並びに刪存す（第一卷至第十卷所載杜律詩杜古詩及附選詩古詩李詩唐宋詩、並刪存）。

一 第十一卷の「不合一門」〔内容未詳。雙聲疊韻の古法に合致しない事例を集めたものか〕に載する所の唐宋古今體詩は全て刪す（第十一卷不合一門所載唐宋古今體詩、全刪）。

一 第十三卷に載する所の杜の散句及び附せし唐宋の句、第十四卷に載する所の杜の古詩及び附せし唐宋の詩は、並びに刪存し併せて一卷と爲す（第十三卷所載杜散句及附唐宋句、第十四卷所載杜古詩及附唐宋詩、並刪存併爲一卷）。

一 第十五卷に載する所の杜賦・杜文、附せし選賦及

び李賦の雙聲疊韻の字は、竝びに皆な刪去して當に自から單行すべし（第十五卷所載杜賦杜文、附選賦及李賦雙聲疊韻字、竝皆刪去、當自單行）。

一 元の書十六卷。今第十一卷と十五卷とは已に刪し、第七卷と八卷とを併せて一卷と爲し、第十三卷と十四卷とを併せて一卷と爲す。共せて十二卷なり（元書十六卷、今第十一卷十五卷已刪、第七卷八卷併爲一卷、第十三卷十四卷併爲一卷、共十二卷）。

そしてこれらの凡例のあとには、一七七九年夏に成つた『杜詩雙聲疊韻譜』十二卷が、一七八一年秋にはさらに『杜詩雙聲疊韻譜括略』八卷へと壓縮され、また雙聲疊韻の格式も計十二種（後述）にまとめられたことが記されている。なお『括略』の名は、明末清初の學者・毛奇齡の著作の體例にならつたものであるという。

乾隆辛丑（四六年、一七八二）仲秋、定本の精粹を摘刪し、『括略八卷』と爲す。「括略」の名は毛西河〔毛奇齡〕先生が『古今通韻』の體例に本づくなり。元の書に較べて僅かに存すること什の二三、又たこれを太

だ簡然たるに失することを恐るるも、要旨已にここに盡くれば、則ち十二格中を出でずして、杜詩雙聲疊韻の能事畢はれり。松霽書す（乾隆辛丑仲秋、摘刪定本の精粹爲括略八卷、括略之名毛西河先生古今通韻體例也、較元書僅存什之二三、又恐失之太簡然、要旨已盡於此、則不出十二格中而杜詩雙聲疊韻之能事畢矣、松霽書）。

じつはこの『括略八卷』を作つた後も、周春はさらに二度これに手を加え、一七八四年秋になって、現在われわれが見ることのできるかたちに落ち着いた。『杜詩雙聲疊韻譜括略』八卷の目録の末尾には「乾隆甲辰（四九年、一七八四）七夕前三日、松霽周春記」と自署のある付記が置かれ、一七六〇年に『杜詩雙聲疊韻譜』十六卷の稿を起してから『杜詩雙聲疊韻譜括略』八卷の成立までにほぼ四半世紀をついやしたこと、數ある杜甫詩の研究書のなかでも雙聲疊韻に論及したものはこの仕事をおいてほかにないこと、杜甫の詩律の細やかさの一端もまたこの仕事によって明らかになるであろうこと、などが記されている。また稿本から刻本へと改める過程で、もともと赤字で示されていた雙聲は刻本では「○」印で表し、また緑字で示されてい

た疊韻は刻本では「、」印で表すことにしたとある。

此の書凡そ五たび稿を易ふ。ただ繁蕪なるに因り、改めて『括略』を創るも、復た兩たび稿を易へ、二十有五年を閲して書を成す。體例秩然として、釐めて八卷と爲す。竊かに謂へらく、古來杜を讀むもの無慮千百家、然れども從つて未だ此に論及する者有らず。余敢へて自ら少陵の功臣に附するに非ず、而れども蹟を探り隱を索むれば、詩律の細も又た其の一斑なるを窺ひ見る（此書凡五易稿、因太繁蕪、改創括略、復兩易稿、閱二十有五年而成書、體例秩然、釐爲八卷、竊謂古來讀杜無慮千百家、然從未有論及此者、余非敢自附少陵功臣、而探蹟索隱窺見詩律之細又其一斑焉）。

抄本の雙聲は紅を以て、疊韻は綠を以て別と爲す（抄本雙聲以紅、疊韻以綠爲別）。

今刻の雙聲は改めて圈を用ひ、疊韻は改めて點を用ふ（今刻雙聲改用圈、疊韻改用點）。

### （三）『杜詩雙聲疊韻譜括略』序の内容

一七八四年に成つた刻本『杜詩雙聲疊韻譜括略』八卷

は、その六年後、はれて刊行の運びとなつた。「譜括略序」の末尾には「乾隆五十有四年（一七八九）、歲次屠維作噩（己酉）閏涂月（十二月）、周春泰谷書」という周春の自署がある。この序文において周春はまず、同書の學術的意義を、古人の主たる業績にも比肩すべきものだと訴える。

『杜詩雙聲疊韻譜括略』の成るや、今に於いて六年なり。始めこれを劄劂（版木を彫る）に付するを謀り、復た簡端に序して曰く「杜集の編は樊澗州（樊晁）より始まりしなり。杜の注有るは趙次公より始まりしなり。杜の評有るは劉須溪（劉辰翁）より始まりしなり。杜詩の編年は魯冷齋（魯訢）より始まりしなり。杜詩の分類は陳浩然（陳應行）より始まりしなり。杜の年譜は呂汲公（呂大防）より始まりしなり。而して杜詩の雙聲疊韻を以て創めて一書を爲すは則ち此れより始まる」と（杜詩雙聲疊韻譜括略之成於今六年矣。始謀付諸劄劂、復序於簡端曰、杜集之編自樊澗州始也、杜之有注自趙次公始也、杜之有評自劉須溪始也、杜詩之編年自魯冷齋始也、杜詩之分類自陳浩然始也、杜之年譜自呂汲公



始也、而以杜詩之雙聲疊韻創爲一書則自此始。

杜甫詩における雙聲疊韻の用例を取り上げる意義について周春は、これはあたかも孔子の容貌にあつたとされる四十九種の特徴を取り上げるようなものであり、この種の特徴自體にはなんら神聖なものが宿つていたわけではないけれども、人々はそれらを見て非凡なものを感じるように、杜甫詩のこの雙聲疊韻もまた、詩聖の一端を窺わせるものだと説く。

蓋し少陵の詩に於けるや、所謂る聖にして知る可からざるをこれ神と謂ひ、而して後世の少陵を學ぶ者も亦た復た皆な聖人の一體有り。才力に由り實に能く古今を牢籠〔包括〕して有らざる所無く、即ち雙聲疊韻の如きは其の詩の一斑に過ぎざるのみ。至巧・至密、此の若し。況んやこれを章句作法の全きに進求するをや。夫れ第だ雙聲疊韻を以て少陵を觀るは、殆んど猶ほ四十九表〔孔子の容貌にあつたとされる四十九種の特徴〕を以て孔子を觀るがごとし。河目・海口、初めは盛徳の至りに關すること無しと雖も、而れども識る

者、其の形貌容體、便ち凡ならざるを覺ゆと謂へば、則ち杜詩の雙聲疊韻も亦た是の若きのみ（蓋し少陵之於詩、所謂聖而不可知之謂神、而後世之學少陵者、亦復皆有聖人之一體、由才力、實能牢籠古今無所不有、即如雙聲疊韻、不過其詩之一斑耳而已、至巧至密若此、況進求諸章句作法之全乎、夫第以雙聲疊韻觀少陵、殆猶以四十九表觀孔子、雖河目海口初無關於盛徳之至、而識者謂其形貌容體便覺不凡、則杜詩之雙聲疊韻亦若是而已矣。

そして同書の刊行は杜甫没後ほぼ一千二十年を経て實現したこと、また唐人らは李杜といい、宋人らは杜詩韓筆といたつけれども、李白の詩も韓愈の文も、杜甫の微妙で奥深い詩の表現力には及ぶべくもないと述べ、周春はこの「譜括略序」をしめくくつている。

今、少陵の没を距つること將に十有七庚戌〔杜甫の没年は庚戌七七〇年〕ならんとし、一千二十年來〔60×17=1020〕、其の詩日々讀めば愈よ新たに、其の義日々出でて盡くること無し。唐人は李杜と並び稱し、杜詩韓筆は宋人毎にこれを並び重んず。竊かに杜の微

妙精深を論ずれば、李韓兩家の及ぶ可き所にあらざる有り。この譜を覽る者、當に益ますす斯の言を信まずべし（今距少陵之沒、將十有七庚戌、而一千二十年來、其詩日讀而愈新、其義日出而無盡、唐人竝稱李杜、而杜詩韓筆宋人每竝重之、竊論杜之微妙精深、有非李韓兩家所可及、覽是譜者當益信斯言）。

二つの序および凡例の内容から、『杜詩雙聲疊韻譜括略』八卷は、先行する稿本『杜詩雙聲疊韻譜』十六卷の執筆を含め、およそ四半世紀の時間をかけ、幾度も刪定して成つたものであること、また杜甫詩のみならず、『文選』の詩篇をはじめ、唐宋諸家の詩における雙聲疊韻の事例をも參照した書物であることが確認できたと思う。

## 二、『杜詩雙聲疊韻譜括略』の特長および問題點

- 卷之一 雙聲正格 疊韻正格
- 卷之二上 雙聲同音通用格 疊韻平上去三聲通用格
- 卷之二下 雙聲借用格 疊韻借用格
- 卷之三 雙聲廣通格 疊韻廣通格

清・周春著『杜詩雙聲疊韻譜括略』成書考（丸井）

- 卷之四 雙聲對變格 疊韻對變格
- 卷之五 散句不單用格 古詩四句内照應格
- 卷之六 諸格摘論
- 卷之七 論各書
- 卷之八上 附録
- 卷之八下 序例

右は『杜詩雙聲疊韻譜括略』八卷の目録である。このうち卷之一から卷之五までは、いずれも「……格」と命名されているとおり、雙聲疊韻それぞれについて計十二種の格式を定めた部分となっている。ただしこれらは内容上、卷之一から卷之三までと、卷之四から卷之五までとの二つの部分に大きく分けることができる。なぜならば、前者は主として雙聲疊韻の精度について論じた部分であり、後者は主として雙聲疊韻の頻度について論じた部分になっているからである。とりわけ前者は、雙聲疊韻の格式に精度上の等級を認めるものであり、正格↓通用格（借用格を含む）↓廣通格へと進むにつれて、雙聲疊韻の精度が段階的に緩やかになってゆくのであって、これが周春の雙聲疊韻論の獨創的な部分である。また卷之六は、「諸格」の語が示すと

おり、それまで論じてきたもろもろの格式を總括する部分になっており、卷之七は「各書」すなわち歴代の詩論書における雙聲疊韻論を引用しながら、その適否を論じている。

本節では、同書の特長および問題点についてまとめてみたい。

## (一) 特長

同書の特長としてまず挙げるべきは、さきにも述べたとおり、雙聲疊韻の判定にそれぞれ「正格・通用格・廣通格」という三段階の等級を設けたことである。具體的には「雙聲正格（聲母が完全に一致するもの）」、「雙聲通用格（聲母が清濁の區分を同じくするもの）」、「雙聲廣通格（聲母が清濁の區分を跨いで近似するもの）」、「疊韻正格（韻母・聲調が完全に一致するもの）」、「疊韻通用格（韻母が一致し、聲調を異にするもの）」、「疊韻廣通格（韻母・聲調が古詩の通押例に照らして近似するもの）」という六つの格式がこれに該当する。筆者はかつて、中唐の慧琳著『一切經音義』の反切が反映する唐代長安音（慧琳音）の體系にもとづき、『杜詩雙聲疊韻譜括略』卷之一「雙聲正格」および「疊韻正格」に挙げら

れた杜甫詩すべての事例について、詳細な檢證をおこなったことがある<sup>(5)</sup>。その結果、周春による杜甫詩の雙聲疊韻の判定はかなりの確であることがわかったのである。たとえば、

數廻細寫愁仍破

〔細寫〕（心母・心母）

\* 雙聲正格

萬顆圓勻訝許同

〔圓勻〕（云母・以母）

↓ 慧琳音で合流

幾年逢熟食

〔熟食〕（常母・船母）

↓ 慧琳音で合流

萬里逼清明

〔清明〕（清韻・庚韻三等）

\* 疊韻正格

一重一掩吾肺腑

〔肺腑〕（敷母・非母）

↓ 慧琳音で合流

山花山鳥吾友于

〔友于〕（云母・云母）

\* 雙聲正格

——〔嶽麓山道林二寺行〕（七言古詩<sup>1395</sup>）

右に挙げた事例のうち、『韻鏡』の分類では一致しない「圓勻」（云母・以母）、「熟食」（常母・船母）、「肺腑」（敷母・非母）などは、慧琳音ではそれぞれ「韋」「時」「方」とい

う一つの聲母に合流しており、よってこの三例は、慧琳音に照らせば、いずれも雙聲正格とみなしうる。また、

寸腸堪<sup>(7)</sup>繾、

「繾綣」(彌韻・阮韻)

↓慧琳音で合流

一諾豈驕矜、

「驕矜」(見母・見母)

\*雙聲正格

——「贈特進汝陽王二十二韻」(五言排律001)

翡翠鳴衣桁

「翡翠」(未韻・至韻)

↓慧琳音で合流

蜻蜓立釣絲

「蜻蜓」(青韻・青韻)

\*疊韻正格

——「重過何氏五首其三」(五言律詩0085)

飄蕭將素髮

「飄蕭」(宵韻・蕭韻)

↓慧琳音で合流

汨沒聽洪鱸<sup>(8)</sup>

「汨沒」(沒韻・沒韻)

\*疊韻正格

——「大曆三年春白帝城放船出瞿唐峽久居夔府將適

江陵漂泊有詩凡四十韻」

(五言排律1305)

右に挙げた事例のうち、「廣韻」の分類では一致しない「繾綣」(彌韻・阮韻)「翡翠」(未韻・至韻)「飄蕭」(宵韻・蕭韻)などは、慧琳音ではそれぞれ「審」「曉」「驕」という一つの韻母に合流しており、よってこの三例は、慧琳音に照らせば、いずれも疊韻正格とみなしうる。

周春は『廣韻』および『七音略』を座右に置いて、杜甫

詩における雙聲疊韻の適否を判定していたと想像されるが、前述のように、慧琳音に見られる聲母や韻母の合流現象に周春の判定が一致している事例があるのは、周春自身の故郷・浙江海寧の方言讀書音に、早期中古音から晚期中古音への變化が反映されているためである。もつともこうした變化は、その他多くの方言讀書音にも反映されているはずであり、浙江方言に限って認められる現象ではないであらう。

## (二) 問題點

以下では、周春の雙聲疊韻の判定において、やや問題となる事例をみてゆくことにする。まず雙聲についてであるが、齒頭音・齒上音・正齒音の分類をまたぐ聲母の組み合わせを、周春が雙聲と判定している事例をかかげる。たとえば心母・生母・書母、清母・初母・昌母および精母・莊母・章母の組み合わせについて、周春はこれらをみな雙聲通用格の語として處理している。

書史全傾撓 「書史」(書母・生母)

↓雙聲通用格と判定

裝囊半壓濡 「裝囊」(陽韻・唐韻) \*疊韻正格

——「大曆三年春白帝城放船出瞿唐峽久居夔府將適

江陵漂泊有詩凡四十韻」 (五言排律1305)

鳥雀苦肥秋粟菽 「粟菽」(燭韻・屋韻) \*疊韻正格

蛟龍欲蟄寒沙水 「沙水」(生母・書母)

↓雙聲通用格と判定

——「暮春枉裴道州手札率爾遣興寄遞呈蘇澳侍御」

(七言古詩141)

此生任春草 「春草」(昌母・清母)

↓雙聲通用格と判定

垂老獨漂萍 「漂萍」(滂母・竝母) \*雙聲廣通格

——「贈翰林張四學士」(五言排律0042)

形骸元土木 「形骸」(匣母・匣母) \*雙聲正格

舟楫復江湖 「舟楫」(章母・精母)

↓雙聲通用格と判定

——「舟出江陵南浦奉寄鄭少尹審」(五言排律1339)

ここではとくに正齒音の位置づけが問題となる。上古音

では正齒音は舌頭音や舌上音に近い音で發音されていた

が、中古音では正齒音(章母・昌母・船母・書母・常母)、齒

上音(莊母・初母・崇母・生母・俟母)、齒頭音(精母・清母・

從母・心母・邪母)は、再構音によればすべて $\text{ʃ}$ や $\text{ʃ}$ のよう

な破擦音と摩擦音という共通點をもつ。聽覺的にもこの三

者が相對的に近いことは否定できない。右の事例にも見ら

れるように、「書史」(書母・生母)「沙水」(生母・書母)「春

草」(昌母・清母)「舟楫」(章母・精母)などの語に對置さ

れたもう一方の語が、いずれもほぼ疊韻正格あるいは雙聲

正格と判定できるのであるならば、杜甫は自身の語感にし

たがって、いわば修辭的見地から、近似する聲母をあえて

雙聲の語として組み立てていた可能性がある。

次に、唇音・舌音・牙音・喉音・齒音の別をまたぐ聲母

の組み合わせを周春が雙聲と判定している事例をかかげ

る。たとえば牙音と喉音の組み合わせや、舌音と齒音の組

み合わせなどを、周春はしばしば雙聲廣通格の語として處

理している。

星垂平野闊 「星垂」(心母・常母) \*雙聲廣通格

月湧大江流 「月湧」(疑母・以母) ↓牙音と喉音

——「旅夜書懷」(五言律詩0836)

鍼灸阻朋曹 「鍼灸」(章母・章母) \*雙聲正格

糠<sup>レ</sup>乾<sup>レ</sup>對童孺

「糠乾」(溪母・匣母)

↓牙音と喉音

——「奉賀陽城郡王太夫人恩命加鄧國太夫人」

——「雨」(五言古詩113)

(五言排律120)

久待無消息

「消息」(心母・心母)

\*雙聲正格

終朝有底忙

「終朝」(章母・知母) ↓正齒音と舌上音

——「寄邛州崔錄事」(五言律詩074)

最是楚宮俱泯滅

「泯滅」(明母・明母) \*雙聲正格

舟人指點到今疑

「指點」(章母・端母) ↓正齒音と舌頭音

——「詠懷古跡五首其二」(七言律詩094)

幸不折來傷歲暮

「折來」(常母・來母) ↓正齒音と半舌音

若爲看去亂鄉愁

「看去」(溪母・溪母) \*雙聲正格

——「和裴迪登蜀州東亭送客逢早梅相憶見寄」

落日留王母

「落日」(來母・日母) ↓半舌音と半齒音

微風倚少兒

「微風」(微母・非母) \*雙聲廣通格

——「宿昔」(五言律詩1012)

義方兼有訓

「有訓」(云母・曉母) \*雙聲廣通格

詞翰兩如神

「如神」(日母・船母) ↓半齒音・正齒音

清・周春著『杜詩雙聲疊韻譜括略』成書考(丸井)

登頓、生層陰 「登頓」(端母・端母/登韻・恩韻)

↓非疊韻(雙聲正格)

「月湧」(疑母・以母)「糠乾」(溪母・匣母)といった牙音

と喉音の組み合わせは、「牙喉音」と總稱されるように、

もともと音が近く、再構音によれば調音部位は同じで調音

方法だけが異なる。一方、「終朝」(章母・知母)のような

正齒音と舌上音の組み合わせを雙聲と判定したのは周春の  
方言讀書音に特有の読み方と思われ、また「指點」(章母・  
端母)のような正齒音と舌頭音の組み合わせを雙聲とした  
のは判定の誤りではないかと思われる。なお、「折來」(常  
母・來母)「落日」(來母・日母)「如神」(日母・船母)の三例  
を周春が雙聲と判定したことについて、筆者はその適否を  
檢證する材料を持たない。

以下では周春によって疊韻と判定された事例を見てゆく  
が、まず疊韻とするよりもむしろ雙聲としたほうがよそそ  
うな事例をかかげる。

傾敬<sup>⑩</sup>出高岸 「傾敬」(溪母・溪母) \*雙聲正格

——「通泉驛南去通泉縣十五里山水作」(五言古詩0592)

空看過客淚 「空看」(溪母・溪母) \*雙聲正格

莫覓主人恩 「莫覓」(明母・明母/鐸韻・錫韻) ↓非疊韻(雙聲正格)

——「題忠州龍興寺所居院壁」(883)

正枕當星劍 「正枕」(章母・章母/勁韻・寢韻) ↓非疊韻(雙聲正格)

——「題忠州龍興寺所居院壁」(883)

收書動玉琴 「收書」(書母・書母) \*雙聲正格

——「暝」(五言律詩119)

邊塞西羌最充斥 「充斥」(昌母・昌母) \*雙聲正格

衣冠南渡多崩奔 「崩奔」(幫母・幫母/登韻・魂韻) ↓非疊韻(雙聲正格)

——「追酬故高蜀州人日見寄」(七言古詩1429)

「登頓」(登韻・恩韻) 「莫覓」(鐸韻・錫韻) 「正枕」(勁韻・寢韻)

「崩奔」(登韻・魂韻) を疊韻とすることについて、筆者は當初、周春の點の打ちまちがえではなからうかと疑ったほどである。ただ周春の方言讀書音が「u, n, ng」を區別できなかつたことから、こうした判定に至つた可能性もある<sup>⑪</sup>。

つきに、十六攝を異にする韻母同士を疊韻とした事例をかかげるが、やはり語尾の子音の違いをふまえずに疊韻と判定しているものが多い。

もある<sup>⑪</sup>。

つきに、十六攝を異にする韻母同士を疊韻とした事例をかかげるが、やはり語尾の子音の違いをふまえずに疊韻と判定しているものが多い。

車箱入谷無回路 「入谷」(緝韻・屋韻) ↓非疊韻

箭括通天有一門 「通天」(透母・透母) \*雙聲正格

要求陽岡暖 「陽岡」(陽韻・唐韻) \*疊韻正格

苦涉陰嶺互 「陰嶺」(侵韻・靜韻) ↓非疊韻

——「西枝村尋置草堂地夜宿贊公土室二首其一」(五言古詩0308)

風物悲遊子 「風物」(非母・微母) \*雙聲廣通格

登臨憶侍郎 「登臨」(登韻・侵韻) ↓非疊韻

白日中原上 「白日」(陌韻・質韻) ↓非疊韻

清秋大海隅 「清秋」(清母・清母) \*雙聲正格

——「哭臺州鄭司戶蘇少監」(五言排律0795)

天雲浮絕壁 「絕壁」(薛韻・錫韻) ↓非疊韻

風竹在華軒 「華軒」(匣母・曉母) \*雙聲廣通格

——「和裴迪登新津寺寄王侍郎」(五言律詩0416)

——「哭臺州鄭司戶蘇少監」(五言排律0795)

——「哭臺州鄭司戶蘇少監」(五言排律0795)

——「哭臺州鄭司戶蘇少監」(五言排律0795)

——「哭臺州鄭司戶蘇少監」(五言排律0795)

——「奉漢中王手札」(五言排律<sup>024</sup>)

翠虛捎颺、  
「颺颺」(養韻・養韻) \* 疊韻正格

丹極上鷓鴣、  
「鷓鴣」(魂韻・登韻) ↓ 非疊韻

——「寄劉峽州伯華使君四十韻」(五言排律<sup>156</sup>)

「入谷」(緝韻・屋韻)「陰嶺」(侵韻・靜韻)「登臨」(登韻・侵韻)「白日」(陌韻・質韻)「絕壁」(薛韻・錫韻)「鷓鴣」(魂韻・登韻)などを疊韻と判定しているのは、周春の方言讀書音が、「-u, -m, -ng」はもとより、「-p, -t-」をも區別できなかつたためかもしれない。しかし筆者は、『十三經音略』十三卷(藝文印書館「百部叢書集成」所收)を書いた經驗をもつ周春が、こうした初歩的なあやまちをはたして犯すだろうか、という疑念をぬぐいきれずにいる。もしかすると上掲の諸事例は、杜甫が自身の語感にしたがって、あえて修辭的見地から、近似する韻母を疊韻として組み立てたものかもしれない、杜甫のこうした創意をおしはかり、周春はこれらをあえて疊韻として處理したのかもしれないのである。

## おわりに

周春著『杜詩雙聲疊韻譜括略』八卷は、先行する稿本十六卷の執筆を含め、およそ四半世紀の時間をかけて幾度も刪定して成ったものであり、杜甫詩のみならず、『文選』の詩篇から李白、王維、孟浩然、韓愈、柳宗元、温庭筠、李商隱、皮日休、陸龜蒙、白居易、蘇軾といった諸家の詩にまで対象を廣げながら、雙聲疊韻の事例を調査した専門的かつ総合的な研究書である。

同書は雙聲疊韻それぞれについて「雙聲正格」「疊韻正格」「雙聲同音通用格」「疊韻平上去三聲通用格」「雙聲借用格」「疊韻借用格」「雙聲廣通格」「疊韻廣通格」「雙聲對變格」「疊韻對變格」「散句不單用格」「古詩四句内照應格」という計十二種の格式を定め、そのすべてにおいて豊富な事例をかかげている。

同書の特長は、雙聲疊韻の判定にあたって、正格・通用格・廣通格という三段階の等級を設けたこと、またその判定には、唐代長安音(慧琳音)に合致する事例がしばしば見られること、などである。その反面、周春自身の方言讀書音に特有の読み方によるためか、漢語中古音の各範疇を



超えた判定もまた多く見られるという問題もある。しかし後者の問題については、杜甫自身がいわば修辭的見地から、近似する二つの聲母や二つの韻母を自在に組み合わせ、新たな雙聲疊韻の語を作り出した可能性も否定できない。そうした事例を周春が取り上げているのは、それらにも杜甫の創意が反映されているものと考えてのことかもしれない。

## 注

- (1) 本稿で扱う同書の記載は、すべて中文出版社（京都市左京区）が一九七七年に刊行した『杜詩又叢』（全八冊）所收の清・嘉慶元年刊本（吉川幸次郎氏所藏本）に基づく。
- (2) 許總著『杜詩學發微』（南京：南京出版社、一九八九）内編第二〇四―二一八頁所收。邦語譯に加藤國安譯、注「杜甫論の新構想」（東京：研文出版、一九九六）第十章「清・周春の杜詩論聲韻學からのアプローチ」がある。
- (3) 加藤氏前掲譯書第四四〇頁から引用。
- (4) 小論「清・周春による杜詩雙聲語の判定基準について——慧琳音を參考に——」（『中國文學研究』第四十二期所收。二〇一六・十二）および同「清・周春による杜詩疊韻語の判定基準について——慧琳音を參考に——」（『中國文學研究』第四十三期所收。二〇一七・十二）を參照されたい。
- (5) 『杜詩詳注』では「圓勻」を「勻圓」に作る。

(6) 詩型のあとに付した算用數字は、『杜甫全詩譯注』（講談社・學術文庫、二〇一六）で採用された、『杜詩詳注』の作品編次にもとづく通し番號である。

(7) 『杜詩詳注』は「腸」を「長」に作る。

(8) 『杜詩詳注』は「鑪」を「鑪」に作る。

(9) 小論「周春と『乾嘉の學』——錢大昕・盧文弨との交遊・論争を接點として」（『中國詩文論叢』第三十五集所收。二〇一六・十二）第一七二頁を參照されたい。

(10) 『杜詩詳注』は「傾敬」を「敬傾」に作る。

(11) 古屋昭弘氏撰『度曲須知』に見る明末の吳方言（東京都立大學『人文學報』一五六所收、一九八二・三）によれば、明末の蘇州府城では、侵尋韻（\*ɣin）、庚青韻（\*ɣeŋ）、眞文韻（\*ɣin）がすでに合流していたという（第七九頁）。周春の故郷である浙江海寧も同じ吳語圏に屬し、こうした合流現象は存在したものと想像される。なお、筆者がかつて浙江省の寧波や杭州に一年近く居住していた體験によれば、現在の浙江人にも鼻母音の區別ができない人が數多くいる。

(12) 『杜詩詳注』は「回路」を「歸路」に作る。

(13) 『杜詩詳注』は「白日」を「白首」に作る。

\* \* \*

作者：丸井 憲

Author：MARUI Ken

標題：清代周春《杜詩雙聲疊韻譜括略》成書考——兼

論其特點和若干問題——

Title：The Research on the Formation of Zhou Chun 周春's

Dushi Shuangsheng Dieyun Pu Kuolue 杜詩雙聲疊韻譜括略

摘要：清代音韻學家周春（一七二九—一八一五）所著

《杜詩雙聲疊韻譜括略》八卷，將此前稿本十六卷的撰寫

包含在內，總共歷經大約二五年屢次刪定而成。除杜甫詩

歌以外，還以李白、王維、孟浩然、韓愈、柳宗元、溫庭

筠、李商隱、皮日休、陸龜蒙、白居易、蘇軾等諸家詩歌

為對象，是一部廣泛調查雙聲疊韻用例，具有專業性與綜

合性的研究書。

該書的特點之一，是在判定雙聲疊韻時專門設定正格、通用格和廣通格這三種階段性等級，此外，在其判定中符合唐代長安音（即慧琳音）的用例屢見不鮮。另一方面，或許是受到周春自身方言讀書音的特殊影響，脫離中

古音各個範疇的例子也很多見。關於此問題，不排除杜甫自身從修辭要求的角度將相近的聲母與韻母自由結合，從而創造出新的雙聲疊韻詞這種可能。周春之所以特別提起這類脫離中古音的用例，可能由於他認為這反映了杜甫的創意。

關鍵詞：杜甫 雙聲疊韻 周春 唐代長安音 方言讀書音